

寒天培地にさすという作業を、交替しながら体験していた。

また、交替の間にフラワーアレンジメント入門として、ミニバラ、ヒイラギ、モミの造花を使ったクリスマス飾り作りの体験もしていた。

訪問する前は、畑でする農業体験だけをイメージしていただけに、人類が築き上げてきた農業の先端科学や、収穫した草花を利用する文化にも触れさせようという取組に、ここでの活動内容の広がりと深さを感じた。

講義と実習が終わると、参加者は、高校の隅にある自分の畑に立ち寄り、家族同士が互いに声を掛け合いながら草取りや畑耕しに精を出したり、収穫物を交換し合うほのほのとした交流も目にする事ができた。



(みんなで農作業)

3 農業体験で育つもの

取材のなかで、「この農業体験で感じたこと」をたずねてみた。

子供たちは、「野菜が嫌いだったけど、自分の作ったものはおいしかった。」「大変だったのは、大きいじょうろでの水かけと、台風に備えてのひも結びだった。」等の感想を述べた。

また、親たちは、「他家族の子供たちの仕事ぶりが刺激になって、自分からしんどい草取り、水かけも続けられたように思う。」「家族みんなで牛ふんまみれになった。これまでは牛ふんに触るなんてとんでもないと思っていたのに。それだけに家族みんなで収穫の喜びを分かち合うことができた。」「ものを育てる経験のなかで生命の尊さを実感してくれることを期待してこの活動に参加した。収穫したものを子供が大事に扱っている姿を見ることができてうれしい。」等とこたえた。

今回の取材活動を通して、子供たちのこうした感性や心の変化をみると、土に触れることの少ない現代の子供たちにもっともっとうちの土と心を耕す豊かな体験をさせることが大切であると痛感することであった。